

金子光晴全集



第二卷

第二卷 詩II 鮫 落下傘 蛾 女た
ちへのエレジー



金子光晴全集



第二卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

金子光晴全集 第二卷 著者金子光晴 装幀者司修 発行者高
梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央公
論社 電話(五六一)五九二一 振替東京二一三四 ©一九七五
昭和五十年十月十日印刷
昭和五十年十月二十日発行



詩

Ⅱ

目次

鮫

5

落下傘

59

蛾

167

女たちへのエレジー

267

後記

367

鮫



鮫	紋	燈	ど	堀	泡	お	自	鮫
		臺	ぶ			と	序	目
						せ		次
						い		

37	32	27	23	19	13	8	7
----	----	----	----	----	----	---	---

自序

武田麟太郎さんに序文をお願いしたが、別に書くこともなさうだといふこと。僕が自分で筆をもつたが矢張、必ず言はねばならぬこともありません。一言、鮫は、南洋旅行中の詩、他は歸朝後一二年の作品です。なぜもつと旅行中に作品がないかと人にきかれますが僕は、文學のために旅行したわけではなく、鹽原多助が儉約したやうにがつがつと書く人間になるのは御めんです。よほど腹の立つことか、輕蔑してやりたいことか、茶化してやりたいことがあつたときの他は今後も詩は作らないつもりです。

僕の詩を面白がつて發表をすゝめてくれた人は中野重治さんで、序文をたのむのはその方が順序と思ひましたが、このあついのにと察してたのむのをやめました。

金子光晴

おつとせい

一

そのいきの臭えこと。

くちからむんと蒸れる、

そのせなかがぬれて、はか穴のふちのやうにぬらぬらしてること。
虚無^{ムヒム}をおぼえるほどいやらしい、

おゝ、憂愁よ。

そのからだの土囊のやうな

づづぐろいおもさ。かつたるさ。

いん氣な彈力。

かなしいゴム。

そのころのおもひあがつてること。
凡庸なこと。

菊面。^{あはた}

おほきな陰囊。^{ふぐり}

鼻先があをくなるほどなまぐさい、やつらの群衆におされつつ、いつも、
おいらは、反対の方角をおもつてゐた。

やつらがむらがる雲のやうに横行し

もみあふ街が、おいらには、

ふるぼけた映畫^{エント}でみる

アラスカのやうに淋しかった。

二

そいつら。俗衆といふやつら。

ヴォルテールを國外に追ひ、フーゴー・グロチウスを獄にたゝきこんだのは、
やつらののだ。

バタビアから、リスボンまで、地球を、芥垢ほこりと、饒舌おしやべりで
かきまはしてゐるのもやつらののだ。

噓くさめをするやつ。髻くしのあひだから齒はくそをとばすやつ。かみころすあくび、きどつた身振
り、しきたりをやぶつたものには、おそれ、ゆびさし、むほん人だ、狂人きちがひだとさけん
で、がやがやあつまるやつ。そいつらは互あひひに夫婦めづとだ。權妻だ。やつらの根
性まで相續うけつぐ悴せどもだ。うすぎたねえ血のひきだ。あるひは朋黨ともだちだ。そのまたつながり
だ。そして、かぎりもしれぬむすびあひの、からだとかからだの障壁しょうへきが、海流かいりゅうをせきとめ
るやうにみえた。

おしながされた海に、雲のやうな陽がふり濺しいだ。
やつらのみあげるそらの無限むげんにそうていつも、金網かなあみがあつた。

……………けふはやつらの婚姻こんこんの祝ひ。

きのふはやつらの旗日だった。

ひねもす、ぬかるみのなかで、碎氷船が氷をたぐのをきいた。

のべつにおじぎをしたり、ひれとひれとをすりあはせ、どうたいを樽のやうにころがしたり、そのいやしき、空虚^{むな}しさばかりで雑鬧しながらやつらは、みるまに放尿^{おしり}の泡^{あわ}で、海水をにがしていった。

たがひの體溫でぬくめあふ、零落のむれをはなれる寒さをいとうて、やつらはいたはりあふめつきをもとめ、かばそい聲でよびかはした。

三

おゝ。やつらは、どいつも、こいつも、まよなかの街よりくらい、やつらをのせたこの氷塊が、たちまち、さけびもなくわれ、深潭のうへをしづかに江りはじめるのを、すこしも氣づかずにゐた。

みだりがはしい尾をひらいてよちよちと、
やつらは氷上を匍ひまはり、

……………文學などを語りあった。

うらがなしい暮色よ。

凍傷にたゞれた落日の掛軸よ！

だんだら縞のながい影を曳き、みわたすかぎり頭をそろへて、
拜禮してゐる奴らの群衆の
なかで、

侮蔑しきつたそぶりで、

たゞひとり、

反對をむいてすましてゐるやつ。

おいら。

おっとせいのきらひなおっとせい。

だが、やっぱりおっとせいはおっとせいで

たゞ

「むかうむきになつてゐる

おっとせい。」

泡

一

天が、青っぱなをすゝる。
戦争がある。

だが、雙眼鏡^{めがね}にうつるものは、鈍痛のやうにくらりとひかる揚子江^{ヤンキーガン}の水。
そればかりだ。

おりもののやうにうすい水……………がばがばと鳴る水。
捲きおとされる水のうねりにのって、
なんの影よりも老いぼれて、
おいらの船體のかげがすゝむ。

らんかんも、そこに佇んで

不安をみおろしてゐるおいらの影も、

愛のない晴天だ。

日輪は、しんこう贖金だ。

二

吳^{ウイメン}滋はみどり、子どものあたまにはびこる、疥癬^{くさ}のやうだ。

下^{シャーカーカン}關はたど、しほっから聲の鴉がさわいでゐた。

うらがなしいあさがたのガスのなかから、

軍艦どものいん氣な筒ぐちが、

「支那」のよこはらをちっとみる。

ときをり、けんたうはづれな砲彈が、

濁水のあっち、こっちに、

ぼっこり、ぼっこりと穴をあけた。